

熊本地震

被災の学生無事を報告

田辺出身 男性2人 備えの大切さ語る

熊本地震で被災した田辺工業高校体操部出身で東海大学熊本キャンパス(熊本市東区)の大学生2人が田辺市に帰省し、母校などで恩師や後輩たちに無事を報告した。大きな揺れと続発する余震、避難生活を体験した2人は「紀南にも大きな地震や津波が来る可能性がある。備蓄や避難場所の確認など日頃の備えは大切」と話している。

被災したのは、基盤工学部(19)。ともに体操部に所属3年の玉置海渡さん(20)と、2015年11月に入学した1回目の大きな地震。同日午後9時26分に発生した1回目の大きな地震。

震の時、玉置さんは大学近くにあるアパート3階の自室、鈴木さんは大学の体操場についていた。「今まで体験したことのないような揺れだった」と2人は口をそろえる。

玉置さんはアパート前の駐車場、鈴木さんは大学のサッカー場に他の学生や地元住民らと一緒に避難した。余震が続き、救急車のサイレンや警報が鳴り響く中、屋外で眠れない夜を明かした。「もう大きな地震は来ないだろう」と同じアパートの各部屋に戻ったところ、16日午前1時25分に発生した地震(本震)に遭った。

「大きな揺れで全く動けず、死ぬと思った」と玉置さん。背中に倒壊した学生が亡くなった東海大阿蘇キャンパス(熊本県阿蘇村)とは、車で30分ほどの距離だという。

田辺ジュニア体操クラブの子どもたちに熊本地震の体験を話す鈴木孝彦さん(左)と玉置海渡さん(田辺市良の明洋中学校で)



通信アプリ「LINE(ライン)」で心配する親や仲間、恩師らに無事を報告した。電気は間もなく復旧したが、水道は使えない状態。建物が傾き、地面の至る所に亀裂が走っていた。16日のうちに山口県から迎えに来た部員の保護者の車に同乗し、下関から電車で田辺市に戻った。

後日、恩師がいる田辺工業高校を訪れ、体操部員らに無事を報告。明洋中学校では、田辺ジュニア体操クラブの子どもたちにも震災の様子を伝えた。

大学に戻るめどは立っていない。玉置さんは「死ぬと思ったのは初めて。紀南にも大きな地震や津波が来るといわれているので、人ごとではない」と話す。鈴木さんは「公共施設の食料など備蓄はすぐになくなるので、自分で用意しておいたほうがいい。まさか九州で被災するとは。自分たちには帰る所があってよかった」と話している。